



「総文祭でカエル班が文部科学大臣賞を受賞しました！」鹿児島への引率から帰るや否や興奮気味でそう話す私に対し、聞いている側はみな決まって「（なんか佐藤が興奮してるし凄そうだけど、どれだけ凄いか分からない…）」という微妙な表情をする。「総文祭」は文化部のインターハイなのだが、残念ながら知名度が低い（かくいう私も関わるまで全然知らなかったので気持ちは分かる）。説明が面倒なので、決まり文句のように「野球で言えば甲子園で優勝したのと同じ！」と言うことにしていて、それでようやく凄さが伝わるようだ。ということで、猿江恩賜公園でヒキガエルの調査を行ってきたハルタ、チシュウ、タクトがなんと、**かごしま総文自然科学部門で優勝し日本一の座に輝いた**。凄すぎ…！！

この研究は、去年の春頃から始まった。ハルタたちが2年生になったばかりの4月、生物の授業の時の何気ない会話で、「この公園のヒキガエルは何匹いるのかな？」「100匹くらいかねー？」なんて話していたら、その数日後には「1日で112匹捕まえました！まだまだいます！」と言ってきて大層驚いたのを覚えている。結局、彼らはこの1年、カエルのお

腹の模様で照合するという途方も無く地道な調査を重ねて個体数を出し、**390匹は確実にいる**ことを明らかにした（チシュウはこの「カエルの腹の神経衰弱」を計50時間以上やったらしい。聞いただけで気が遠くなる）。この公園の規模と環境を考えたら、この個体数は驚くべき数だ。両生類は全国的に絶滅が危惧されていて、**なぜ猿江には多いのかが分かれば保全に繋がられる**。ただし、この「**人力神経衰弱法**」は大変すぎてコスパがあまりに悪い。「じゃあ、機械学習の画像認識を取り入れてみたらどうだろう！」ということで、最近では**情報班とのコラボが始まった**。さらに、この研究がきっかけとなって地域の人たちとのつながりも増えて、あれよあれよと話が広がっていくのが、私も見ていてとても楽しかった。

東京代表に選ばれてからは、「**DNA鑑定**をやってみよう！」と言うので、「ようしやったらう！」と気合を入れて、はるか昔の大学院時代の記憶を辿りつつ、足りないお金は教員の研究助成金を初めて申請して工面しつつ、**分子実験にチャレンジすることになった**。見栄を張ったはいいものの、十数年ぶりの電気泳動が全然上手くいかない…。生徒に教えるどころか、自分も原因が分からず頭を抱えていた。そんな時、ハルタが自分なりに色々調べて、原因をあれこれ議論し始めた。この時のやりとりは明らかに高校のレベルを超えていたと思う。すごい…。

生き物を対象とした研究は、季節性があったり、そもそもどこに着目するかが難しかったり、生き物は「好き」だけど、「研究」となると難しい…となってしまうことが多いと感じている（別に研究しなきゃいけないわけではないが）。生物調査は超地味で超地道な作業なのだ。私にも言えることだが、飽きっぽくてすぐ諦める性格にはこういう作業は向いていない。だからここまでやってきたハルタたちは本当に凄いと思う。私は見ていただけたが、彼らのおかげで良い経験をさせてもらった。一生の思い出ができた。



発表当日の様子



祝・文部科学大臣賞受賞！

ヒキガエル調査の様子



カエルの捕獲

雨の日も極寒の冬場もめげずに公園に通い続けた。



地域の方との連携

公園管理者や工事業者と相談しカエル保全に取り組んだ。



お腹の模様の照合

のべ500匹以上お腹の模様を見比べたらしい…。脱帽。



卵からDNA抽出・PCR

取り出したDNAを増幅する。



電気泳動の様子

ビベットマンを使いこなす。